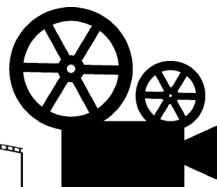


MOVIE



『ファーストミッション』

「脳卒中サバイバーと映画をつくる」。この言葉を聞いたとき、あなたはどんな映画を想像されただろうか？

映画『ファーストミッション』は、脳卒中サバイバーと共に作ったガチアクション映画だ。新型コロナウイルスの影響を真っ向から受けたエンタメ業界や、活動自粛により社会参加意欲が減少してしまった障がい当事者を支援するため、プロジェクトが立ち上がった。本稿では、その映画制作を通じて、脳卒中当事者の心情と行動に起こった変化について述べたいと思う。

発起人で総監督はHAYATE氏。国際的なアクション俳優でもあり、アクション監督、コーディネーターとして『映画泥棒』、『ザ・ファブル2』等、日本を牽引する作品にかかわる。共同企画は、「脳卒中フェスティバル」というイベントの代表で、脳卒中患者だったPTの私、小林純也。一見無関係なこの2人には、深い関係があった。

われわれは、16年前に私が23歳で脳卒中を発症し、まだ麻痺が残る身体で機能回復に挑戦していたころ、トレーニング施設で知り合った友人同士だ。以来親しくさせていただいているが、2人の間には、障がいや健常といった垣根は存在していない。

2019年に世界中を新型コロナウイルスの猛威が襲い、HAYATE氏が主戦場とするエンタメ業界は、「不要不急」と位置づけられ、非常に苦しい状況となった。また、障がい当事者・医療職者を中心に運営する脳フェスも苦境に立たされていた。それだけではなく、障がい当事者は活動範囲の狭小化に伴う廃用症候群等、そのADLにも問題が生じていた。

障がいがあってもなくても関係なく、チャレンジすることを応援するガチアクション映画をつくり、同じような境遇に苦しんでいる方々の一助になりたいと、HAYATE氏から協力を要請された。脳卒中当事者とアクション映画をつくる。一見無謀な挑戦であったが、「1人では難しいことでも、専門家を交えた2人、3人でやればできるはず」と、自身も初の脚本・監督作品に挑戦するHAYATE氏の提案に、ノーマライゼーションの本質を感じ、快諾することとなった。

映画には、3人の障がい当事者が出演しているが、あえて障がい像には焦点を当てないようにしている。演者は、障がいがあるから出演しているのではなく、その演者自身の個性が役柄として必要だったから出演しているに過ぎないからだ。また、裏方でも、脳卒中サバイバーが俳優に片麻痺の演技指導をしたり、真冬で屋外の撮影に凍えるキャストに温かいスープを配り、撮影地周辺の人止めをした。外出が難しい当事者も、SNSでの広報を積極的に行った。楽な環境ではなかったが、かつて誰かに助けられた自分が、別の誰かを助けている。そんな状況が、最大の報酬であった。

「新型コロナをぶっ飛ばせ！」を合言葉に始まった撮影であったが、撮影開始時に4日後に緊急事態宣言が発令されることがわかり、巻きに巻いて撮り切った。強烈なカウンターパンチを食らったが、『カメラを止めるな!』で知られる上田慎一郎監督をはじめとする業界関係者からも好評で、現在公開に向けて準備を続けている。

スタッフとして活発に活動してくれた当事者の方は「障がい者となり、何事も“できない”と考えがちになっていた。でも、完成した映画を観て、私は強くなれた気がした。自分も戦っているみたいに」と笑う。

障がい者、健常者。そんな言葉で括り分ける必要のない世界が、そこには広がっていた。この映画の価値観が、広く世に浸透することを願っている。(小林 純也)

■映画タイトル 「ファーストミッション」

監督：HAYATE
公開時期・公開場所：
未定

配給：未定
上映時間：90分
脚本：HAYATE
出演者：HAYATE、
小玉百夏、小林純也、
他

問い合わせ先：
firstmission.hn@gmail.
com

